

発行：2025年7月15日

研究所 だより

39
号



明治学院大学 社会学部附属研究所

〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37
TEL 03-5421-5204・5205
メールアドレス issw@soc.meijigakuin.ac.jp
ホームページ <https://soc.meijigakuin.ac.jp/fuzoku/>

所長ごあいさつ

当研究所の歴史も長くなりました。その源流である「明治学院大学児童相談所」が開設された1956年からは約70年。当時はまだ社会福祉学科は存在せず、社会学科が文学部内にあっただけでした。その後、1965年に社会学部が二学科を要する学部として独立し、さらにその5年後の1970年に「児童相談所」が「社会学部附属研究所」へと改組されてからでも、すでに半世紀を優に超える時間が経っています。

この間、社会全体の変容を背景としつつ、明治学院大学の内部においても、学園紛争、社会学部学内学会（正式名称は「社会学・社会福祉学会」）の創立、コロナ禍などの大きな出来事が起こり、そのたびごとに当研究所のあり方も変化を強いられてきました。しかしながら、その基本的な役割は一貫しています。それは、さまざまな人びとの間をつなぐ、架橋するという役割です。研究活動の面において両学科の教員間を、相談活動やリカレント教育活動などによって大学の内外を、学内学会においては教員・学生・OB/OGを架橋する。日々の教育活動に追われる学部とは別組織であるからこそ可能になるこうした活動を、今後も地道に継続していくことが、当研究所の存在意義であろうと考えています。

社会学部附属研究所 所長 加藤 秀一

各部門主任報告



調査・研究部門

調査・研究部門は、社会学および社会福祉学における調査・研究活動の支援と、その成果の社会への発信を担っています。

2024年度の「一般プロジェクト」では4件の研究が採択されました。これらは外部資金獲得に向けた準備研究や、特定の今日的課題に焦点を当てた機動的な研究として活発に推進されています。実施された各プロジェクトの成果は、刊行予定の『研究所年報』56号を通じて公表されます。

また、本年2月に関西学院大学の貴戸理恵教授を研究所にお招きし、「対話的な場」の質的調査における調査者-協力者関係」と題する講演会を開催しました。講演では、質的調査における倫理綱領と現実との間に生じる「ずれ」、調査協力者との関係構築のあり方、そして「対話的な場」における社会学者の役割について、講師自身の豊富なフィールドワーク経験に基づき論じられました。参加した社会学部教員や大学院生らにとって、自らの研究を省察する貴重な機会となりました。

調査・研究部門としては、2025年度も引き続き、質の高い研究活動を支援するとともに、社会学および社会福祉学における議論を深める企画等を通じて、本研究所の研究力向上に貢献していきます。

(主任 松波 康男)



2024年度講演会案内

相談・研究部門

2024年度の相談・研究部門の活動は、2023年度から新たな活動の柱になった卒後支援を継続し、「MG SWersのつどい」と小規模の「MG SWers' カフェ」(全3回)を開催しました。昨年度までのⅠ. 地域活動支援、Ⅱ. 講座・研修活動、Ⅲ. 卒後支援、Ⅳ. 研究活動のうち、今年度はⅢをMG SWers 支援に再編し、卒業生だけでなくソーシャルワーカーになることを目指す在学生が交流できる場を企画する予定です。卒業生同士が気軽に語り合う場としての「MG SWers' カフェ」は昨年度と同様に開催します。そのほか、各種講座を実施しますので、皆様のご参加をお待ちしております。

(主任 金 圓景)



MG SWers カフェ



ソーシャルワーカーのつどい

学内学会部門

明治学院大学社会学・社会福祉学会(通称:学内学会)の2024年度の活動は、10月に卒業生部会と学生部会が合同で講演会を開催し、「大学生のためのライフプランニング」をテーマとして、講師にライフプランナーの新美友佳子さんを迎え、自分の将来像、人生設計についてお話し頂きました。

12月に開催された研究発表会では、4つの分科会で合計35件(ゼミ6件、調査実習クラス発表2件、フィールドスタディー2件、個人25件)の報告が行われ、それぞれの分科会で活発な議論が交わされました。

その他、6月の総会では三輪清子准教授(社会福祉学科)に「子どもと里親 ~地域社会における緩やかなネットワークの形成を目指して~」をテーマに特別講演をいただき、また2月末には、新しい学会誌『STEPs 2025』を発刊しました。学生部会(通称:STEP)には新入生が加わり、活発に活動を行っています。どうぞ、引き続きご支援のほど、よろしくお願い致します。

(主任 明石 留美子)



2024年度講演会



2024年度三輪先生特別講演会



生活保護の現状と今後のあり方に関する研究 —生活保護担当職員の実践から考える—

本プロジェクトでは、生活保護業務の現状と今後のあり方を検討するために、関東圏の福祉事務所に勤務する生活保護担当職員の参加を得て、8月、10月、12月、2月に計4回の研究会を実施した。各研究会には、毎回1名の生活保護の実務経験をもつ学識経験者を講師として招き、「生活保護業務の現状と課題、今後のあり方について」をテーマにご講演いただいた。講演を受けて、参加者は職種別に分かれてワールド・

カフェ方式によるディスカッションを行ったが、活発な議論がなされるとともに、課題解決に向けた方策等についても有意義な意見交換がなされた。第1回は65名、第2回は42名、第3回は34名、第4回は57名と、多くの参加者が得られ、自治体を越えた交流が深まる機会ともなった。今後は、研究会での議論を分析し、成果をまとめる予定である。研究会にご協力いただいた講師、参加者の皆さまにお礼を申し上げたい。

(代表 新保 美香)

ヒト生殖細胞系列のゲノム編集をめぐる〈人々の形而上学〉の概念分析的研究

昨年度から継続して、ゲノム編集技術がヒトに応用された場合に生じうるさまざまな倫理的問題の意味をよく理解するために、直接的な是非の判断からいったん身を引いてその基本的な構造を考える作業を進めた。ゲノム編集はその対象によって「体細胞系列ゲノム編集」と「生殖細胞系列ゲノム編集」の二種類に大きく分けられ、前者についてはこれまでの遺伝子治療の延長上にあるものと理解されるがゆえに特段の倫理的問題は生じないが、後者は世代を超えたヒトという種そのものの改変につながりうるがゆえに重大な倫理的問題を含む

と考えることが一般的になりつつある。実際、前者を利用した医療行為は実施され始めている。これに対して、本プロジェクトが合焦する「個人の同一性への影響」という観点からは、二種類のゲノム編集間の差異そのものの根拠が問われることになる。すべての個人が元は一對の卵と精子、あるいは一個の受精卵/胚から発達した存在者であるなら、この発達プロセスのどのステージでゲノム編集が行われるとその人の同一性が変更されるのかは自明ではない。こうした問題についてさらに精緻に考察していく予定である。

(代表 加藤 秀一)

社会福祉士国家資格制度の制定と変遷に関する調査研究

少子高齢・人口減少社会が進展しつつある現在、社会福祉、特にそれを実現するための方法・技術であるソーシャルワーク、あるいはその担い手であるソーシャルワーカーに対して、社会的な期待が高まっている。わが国においても、ソーシャルワーカーは「専門職」として認識され、その国家資格として、社会福祉士、精神保健福祉士の2つが制度化されている。しかしながら、専門職資格としての社会福祉士は制度化以来、30年以上の年月が経っているにもかかわらず、その社会的

認知度は低く、またその役割や機能などに関してこれまで必ずしも十分に検証作業が行われてきたわけではない。そこで、本研究プロジェクトでは、社会福祉の専門職資格のなかの社会福祉士に焦点をあて、歴史的視点からこの国家資格がどのように成立し、その後、わが国の社会福祉やソーシャルワークの発展にいかなる役割や機能を果たしたのかについて、調査研究（史料収集や行政担当者等へのヒアリング調査等）を通して明らかにしようとしている。

(代表 和気 康太)

カンボジアにおける生活課題と社会福祉支援 —日本に移住する人々の母国での生活状況を理解する—

本研究では、カンボジア国内の社会福祉関連団体、日本語学校の運営者および教師、技能実習訓練生、日本語学科の大学生に質的調査を行った。リサーチクエスションとして、カンボジア国民はどのような生活課題を抱え、どのような社会福祉支援を受け、日本での就労を計画している人々は何を解消するために来日するのかの3点を質問した。調査対象はいずれも、特に深刻な課題に直面することなく生活していた。カンボジアでは医療保険を含め徐々に社会保障が整備されて

いるが十分に周知されていないこと、サービスの対象が限定され必要な支援が受けられない状況が明らかになった。1-3カ月以内の来日が決定している技能実習訓練生からは、10名の調査協力者のうち1名を除き、技能実習を終えた帰国後の将来の希望が日本で習得する技能と一致しない。先行研究でも報告されているように、技能習得ではなく、経済的な課題を解決するための手段として技能実習に臨む状況が見受けられた。

(代表 明石 留美子)

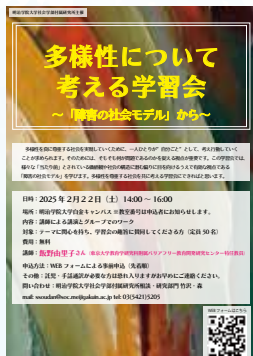
学習会などの開催報告



相談・研究部門が2021年度から「誰もが地域で自分らしく暮らしていく」社会の実現のために行ってきた活動は、2025年度に5年目を迎えました。

2024年度には、「ひきこもりなど生きづらさのある当事者・経験者とともに支援や社会のありかたを考える連続学習会」に加え、新たに「多様性について考える学習会」を開催しました。また、港区子ども家庭支援センター主催の「ヤングケアラー支援サポーター養成講座」にも協力するなど、地域との連携を深める取り組みも進めてきました。

2025年度も様々なイベントを企画中です。最新の情報は、相談・研究部門のLINEやInstagramにて随時発信していますので、ぜひご覧ください。



多様性について考える学習会



連続学習会

公式 SNS



LINE



Instagram



@SHAFUKEN



2025年度社会学部附属研究所 プロジェクトの紹介



一般プロジェクト

- ☆ デンマークの移民政策と統合プログラムの実際
(代表 坂口 緑)

- ☆ 存亡倫理 Existential Ethics と宇宙倫理の交錯についての基礎的研究
(代表 稲葉振一郎)

- ☆ ヒト生殖細胞系列のゲノム編集をめぐる〈人々の形而上学〉の
概念分析的研究
(代表 加藤 秀一)

- ☆ アスベストとPFASのリスク対応に関する環境社会学的研究
(代表 藤川 賢)

- ☆ シンポジウム ステップファミリーの研究と支援
—日本の現状と韓国との対話—
(代表 野沢 慎司)

- ☆ 脆弱性のある人のリプロダクティブ・ヘルス/ライツと子どもの権利
—社会は何を支えることができるか—
(代表 柘植あづみ)

- ☆ 生活保護業務の現状と今後のあり方に関する研究
—日常業務をよりよいものとするためにできることを考える—
(代表 新保 美香)

- ☆ 認知症予防ではなく、認知症と共に生きるための啓発活動
—若年性認知症当事者による講演会およびピア活動—
(代表 金 圓景)



2025年度社会学部 附属研究所スタッフの紹介



所長	加藤 秀一
調査・研究部門主任	松波 康男
相談・研究部門主任	金 圓景
学内学会部門主任	明石留美子
所員	鬼頭 美江
//	久保 美紀
//	関水 徹平
//	柘植あづみ
//	佐藤 正晴
//	加藤丈太郎
研究調査員(調査・研究部門)	丹野さきら
ソーシャルワーカー(相談・研究部門)	竹沢 昌子
助手	森 香苗
教学補佐	坂本 啓子
学内学会部門事務担当	二木 鈴香